

セツ の ひら

NO.81



大学時代、教育行政の時間に必ず国家権力と教育について語る先生がいた。1〜2時間語るのではない。1年の授業で2か月間語るのだから。「教育が権力に屈したとき教育はどうなるか」「教師をめざす人は権力の怖さを知り認識しなければならぬ」等々。日本が侵略戦争に突入していく中で教育が果たした役割や、その教育がどんな青年たちをつくりだしていったのかを歴史の事実をたどりながら語るのだから。

あれから40年、戦争をする国づくりを目指す内閣の下で、教育が権力の激しい攻撃にさらされている。小中学校はもろろん高校、大学への攻撃も厳しさを増す。話題になりつつある高大接続は単にセンター試験の変更ではなく、学制の変更(単線型から複線型へ)を意図していると言われる。また「学問・研究の自由」「大学の自治」を無視した大学再編が強行されようとしている。

教育の目的の一つは賢い主権者を育てること。それは「民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献」(1947年・教育基本法)のできる教育の実現でもある。

戦争か平和か、民主主義かファシズムか、地球環境を守るのか破壊するのか、私たちに課せられた課題は大きい。しかし、この難問を解決するのは私たち人間である。来年から18歳の青年たちが主権者として選挙権を行使する。少しの不安の中にも大きな希望を抱いて。

高橋 正行 (センター運営委員)

ひと言

歴史の岐路の中に生きている私たち

目次

ひと言	高橋 正行	1
特集 子どもとスポーツ文化		
今日のスポーツの中の子どもたち	久保 健	2
子どものからだ・スポーツの現状と体育科の役割	黒川 哲也	6
教育現場における「組体操」問題の語り方	神谷 拓	10
小特集 3・11と学校		
「震災からの復興〜七ヶ浜を考える」の取り組みより	瀬成田 実	14
仮設校・間借り校の今		
あれから5年、そして後1年	吉長 牧子	16
仮設校舎で過ごした四年間	藤原香奈子	16
勝つっべや心一つに山二っ子	泉田 真孝	17
あと4か月で閉校 今、思うこと	竹下 修央	17
教育時評		
新制度元年 保育現場で起きていること	小幡 幸拓	18
子どもと学校		
綴り方実践の中で大事にしたいこと・してきたこと	高橋 三代	19
おすすめBOOK	酒井 文子	20
わたしの出会った先生 12		
ある校長のこと	佐藤 正夫	21
相談員になって2年半	齋川 勝利	22
おすすめ映画	鈴木 吉雄	24
センターの動き		24

特集 子どもとスポーツ文化

春夏の高校野球、そしてオリンピックや各種ワールドカップなど、大きなスポーツイベントが開催されると、あちらこちらで大騒ぎする人々を目にする。こんなに日本にはスポーツ好きがいるのかと驚かされる。学校でも運動会と学芸会は二大行事などといわれる。共通しているのは、イベントが終わると、潮が引くように、前日までの高揚した姿が見えなくなる。

吉野弘は「スポーツの国際試合は見ていて気も

ちがいい」「スポーツというものは、人間から集団とか門閥とかいう個人以上の権威を剥奪し、人間を無垢な個人に引き直して戦わせてみようとする『戦い方の理想態』ではなかるうか」と述べる一方で、「スポーツ愛好家は多いようだが、大方の人々は、スポーツのどこを見ているのだろうか」とエッセイ集『くらしとことば』の中で疑問を投げかけている。

また国分一太郎は『しなやかさというたからも

の』で、あそびについて「あそびは、子どもの真面目であった。真面目としてのあそびは、自然ともにあった。子どものからだともにあった。そして、なかまともにもあった。あそびは、こともを、すこやかにした。かしくした。しなやかにした」と述べている。子どもたちの遊ぶ姿が町の風景から消えた今、改めて遊びも含めた子どもとスポーツ文化を考えるきっかけとなるように、3名の研究者に寄稿していただいた。

今日のスポーツの中の

子どもたち

久保 健

はじめに

私は現在、日本体育大学に単身赴任中で川崎市に住んでいます。歩いて5分ぐらいで多摩川に出るので、毎朝、河川敷を散歩するのが日課になっています。歩いていると、ランニング、サイクリング、犬を連れかけた散歩、野球やサッカーやゴルフの練習をしている人など、さまざまな人に出会います。その点では、この辺に住んでいる人は都心に比べると恵まれた運動環境にあります。しかし、平日は子どもの姿を見ることはほとんどありません。30代の父親が毎朝、小学校低学年の男の子と2人で

サッカーの練習をしている光景ぐらいです。

ただし、土日ともなれば、色とりどりのユニフォームを着た子どもたち、コーチや指導にあたる父親たち、おそろいのグラウンドコートを用意した母親たちによる、野球やサッカーの試合の花盛りとなります。それはいいのですが、この子どもたちは、平日はどこで野球やサッカーをやっているのだろうか？ それとも、土曜ないし日曜だけスポーツをするのだろうか？ が疑問になります。

私がここで見かけた子どもらしい未組織の運動遊びやスポーツ活動は、昨年の秋の2か月ほどの間、小学校高学年ぐらいの子どもたちが男女合わせて10人ぐらいで、野球をやったりリレーをやったりする、ほほえましい姿です。これ以外には、釣りをしたり、神社の木に登ったり、公園（スポーツは禁止）で鬼ごっこをしたりしている姿を見ることはありません。

子どものからだと動きの「耕しそびれ」と偏り

私は、「児童スポーツ教育学部」という体育・スポーツの指導を得意とする小学校の教員を養成する新学部を立ち上げて3年目を迎えたところ

ろです。3年次からゼミ活動が始まり、私のゼミにも14人の学生が入ってきました。今年のゼミでは、目黒区のM小学校で保護者が企画する運動教室（隔週の火曜日の夕方、1〜6年生対象）と、都心にあるC区が2020東京オリンピックに向けて始めた「子ども得意スポーツ発見事業」（長期休業期間を除く毎週水曜日の夕方、年間30回、4・5年生対象）という企画に協力しています。どちらも、2〜4回を1セットに学生4人ずつ交代制でチームを組んで、運動遊びやスポーツの基礎の指導にあたっています。

ここでは、本格的なスポーツを指導するというよりも、その少し前段階の、いわゆる9・10歳の壁の前（プレゴールデンエイジと言われる）の子どもたち向けの、基礎的な動きやコーディネーション能力の耕しをねらった運動遊び（なわとびや石けりやまりつき、鬼ごっこなどの昔遊びも含む）とスポーツの基礎づくりに取り組んでいます。しかし、低・中学年の子どもはすぐ「ドッジボールやろう」と言い、中・高学年の子どもはバスケットボールやサッカーがやりたいと言って、私たちの用意したプログラムはあまり受けがよくありません。そこで、試しにドッジボールやシュートボールをやってみると、喜んでやるのですがとてもゲームが成立する域にはほど遠いのです。もちろん、指導する学生の未熟さはあるとしても、子どもたちの「やりたいこと」と「やれること」の乖離が甚だしいのです。

低・中学年の場合、ケンパー跳びがうまくできないとか、ボールがうまく投げられないといった、基本的な動きが耕されていない子が目につきます。小学校では1年生からスポーツテストをやっているのですが、お手玉やテニスボールでも投げる動きが身につけていない子どもに、手で握りきれないソフトボールを投げる距離を測って何がみられるというのでしょうか。また、運動能力の個人差が甚だしいことや、一人の子の中であるものは得意だが違うものは全くダメという偏りがあることも目につきます。先日、C区の教室に来ている子の母親から「うちの子は、自分で動くことはできるのですが、ものを持つたり操作したりする運動が全くダメなのですが……」という相談を受けました。子どもたちの中には、学習塾だけでなく、サッカー、バスケ、水泳、体操、ダンスなどの習い事をしている子がいるのですが、自分が習っているもの以外には

「からだ動き」の応用がきかないようなのです。

子どもたちの生育環境から「時間」「空間」「仲間」の3つの「間」が失われて、からだを使って遊び込む経験がやせ細ってきていると言われ始めて久しくなりますが、そのことと関わって、「スポーツは遊びが担っていた機能を担えるか？」と問われることがあります。この問いには安易に「イエス」と答えることができません。からだ動きの問題だけに絞っても、運動経験の多様さ、そこで耕されるからだ動きの豊かさなど、スポーツでは担いきれないものを、遊びはたくさん持っていたように思えます。

子どものスポーツへの向き合い方・仲間との関わり方

高学年になると、各スポーツ種目のとり組みが始まります。しかしこの時期は、子どもたちのスポーツや運動へのとり組みが二極化する分岐でもあります。中学生（14歳）で週7日間の総運動時間が60分未満の子どもが男子では6・9%、女子では21・8%も出てきています。（文部科学省「平成26年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書」）

私の大学の近くの世田谷区の住宅街の小学校の先生の話では、体育授業やスポーツへの向かい方が4年生までと5年生以降では大きく変わるそうです。それは、8割前後の子どもが私立中学校の「お受験」をめざした学習塾通いを始めるため、そのことが子どもたちの生活をとても忙しいものになっています。私たちが取り組んでいるC区の教室にも、いつも終了15分前くらいに来る子がいます。何故そうなるのかと尋ねたら、学校から下校した後、スイミングに行つてから教室に来るためなのだといいことでした。この子はおそらく学習塾にも通っているのではないのでしょうか。

こうした高学年の子どもたちとボールゲームをやると、体力や技能の差が大きいことに加えて、相手が近くにいやと遠くにいやと、うまくい子だろうとへたな子だろうとお構いなしに「おもいっきり」投げたり蹴ったりする乱暴さが気になります。何のために、どこに、どんなボールを投げるのかを考え、投げたボールを捕るのが誰なのかという相手を目指して、動きをコントロールする意識が感じられないのです。そうになれば、運動の苦手な子にはそんなボールをキヤッチすることができ

はずもなく、おびえるか、プレイしている子どもたちのまわりをただ走り回っているだけ、というゲーム展開になります。このことは、今日の学校体育やスポーツ指導が主としてパワーアップすることを重視して行われている傾向とも関係しているように思われます。

また、こうしたからだや動きの問題に加えて、指導している学生たちの悩みは、子どもたちの参加態度や友達との関係にもあります。学級担任でもなく、複数のクラス・学校から来ている寄せ集めの集団に対して、3回前後で種目と指導者が変わっていくので、一人ひとりの子どもへの継続的な働きかけが難しいのに加えて、やはり最近の子どもたちのスポーツに関わる育ちの難しさがあるようです。

例えば、チームで作戦の相談をしようと呼びかけても話し合いが成立しません。ひどい場合は、興味がないうちをやっていては床に寝転んだり他の子がやるのにちよっかいを出したりして、面白そう（自分に取ってやりがいがあるような）ことになるまで参加してワンマンプレイをしたりします。さらに、うまくできない子（特に女子）への罵声や暴言も聞かれます。「いじめ」に近いこともあります。先日、ある子の保護者から、「うちの子が仲間外れにされてプレイの順番が回ってこなかった」というクレームを受けました。ボールゲームの時に1・2回目は休んで3回目に出て来た日の出来事のようなので、教室風景を撮った映像で確認してみたところ、ゲームにはちゃんと出場していましたし、ボールも回ってきていました。どうも、ゲーム待ちの練習時のことのようなのです。

こうした練習やゲームへの参加態度や、仲間や相手との関わり方は、今日の子どもたちが受けている体育授業や少年・少女スポーツの中で培われてきたものです。スポーツ少年団やリトルリーグなどに入っている子どもの中には、その指導者の言うことはよくきくの、学校での教師の言うことは全くきかないという子もいるようです。ルールについても、「審判の見えていないところでの反則は反則ではない」という指導を受けている場合もあります。また、親の考え方にも問題があります。以前、ある柔道で有名な高校の柔道部員の多くが近くの町道場に所属している、その道場の指導者が柔道部の指導にもあたっており、その指導者の下で体罰と暴力が行われていたことが問題となったことがありま

す。その際に、その体罰と暴力を免罪し、強くなるためには必要だと考えていたのは親たちだったということでした。スポーツ批評家の永井洋一氏が『スポーツは「良い子」を育てるか』(NHK出版、2004)をはじめとする何冊かの著書で指摘しているのも、こうした少年・少女スポーツの指導者や親たちの心得違いの実態です。

そして、そうした指導者や親たちの生きてくる今日の社会が、新自由主義的な弱肉強食の競争の中にあることがその背景となっています。したがって、これを

克服して、「みんなが・みんなで」練習やゲームを楽しめる参加態度や規律を形成し、フェアプレイが根付き、仲間や相手への「尊敬の念(レスペクト)」のある子どもたちのスポーツのあり方を築いていくことは、困難な、しかし重要な課題です。

子どものスポーツ観を問い直す

前述したような子どもの遊びやスポーツの状況の中で小学生時代を過ごし、中学・高校では運動部活動に参加するか否かで二極化するスポーツとの関わりを持つ中で、子どもたちはどんなスポーツ観を育んで行くのでしょうか。この点に関わって、今年(2015年8月)に仙台で開催された「教育のつどい」への澤豊治先生のレポート「現代中学生の生きづらさを考える」が強く印象に残りました。

この中で澤先生は、生徒たちの体力テストデータは昔より優れている



の、自らの身体を制御する力、ある意味で感覚に近いものの未発達が気になると述べています。そこで澤先生は、基本的な身体の耕し直しをベースにおいてマット運動に取り組みました。小学校で既習した前転・後転を取り上げて、その平易な技でどうすれば美しく見えるのかを追求し、次に、倒立前転と側転、そしてそれらの技を組み合わせた連続技の表現を追求しました。その授業の中で、運動能力の高い生徒から「おもしろない。もう飽きた」という声が出てきました。それに対して、「前転はどうやったら美しくできるのか、本当にわかっているのか」と問い直し、比較・観察・分析と相互批判を通して、全員がきちんと美しくできる方法をみんなで体験してほしいと投げかけて授業を続行しました。

しかしこれに対して、成績優秀でスポーツ万能の生徒からこんな発言が出てきました。

「先生の授業は、言っていることは文句言えないけど、いつもできない人の気持ちばかり考えて……どうやったらみんなできるようになるかばかり中心にして授業をしているように感じます。できる人の気持ちをもう少し考え、できる人を伸ばして、できる人はしっかりといてこいよ！みたいな授業にしてほしいです。数学や英語みたいな授業でないと僕たちが損をしているように感じます。……先生は少し甘い。世の中は競争やと思います。強いものが勝つ。負けとかなかったら努力せなあかん」

この報告は実践途中のもので、この生徒が授業の中でどうなったかはわかりませんでした。しかし、澤先生には以前にも同じような授業をした報告があります。（先生！クサイ授業もいいもんですネー）『たのしい体育・スポーツ』1998年12月号）そこでも、生徒会副会長で野球部の生徒からこんな発言が飛び出してきました。

「先生の言っていることはそうだなと思います。先生が何をしようと思われているのかも僕には予想が付きません。でも、本当に今の僕たちにそんなことが必要なんですか……先生は、青春ドラマをみて先生になろうと思っただけですか？」

しかし彼は、澤先生のねばり強い授業の中で変わって行きました。

『みんながわかってく、みんなができるようになる』こんな目標を立ててやる授業など今までの私たちにとってあまりにもバカげていると思っただけ。オリエンテーション終了後、私は少なくともこの時期に怪我だけは

しないで過ごそうと思っていた。……私はこの目標が非常に重く嫌になつてきた。そして先生の言葉に矛盾と怒りの感情が起きたのもこの時期でした。……しかし、あのレポートは私の家庭学習の計画を大きく狂わせ、私を悩ませました。……グループノートの中に各人のいろいろな想いが描かれていて、その仲間の想いに触れた時、幾度となく今までに経験したことのない心の揺れを感じるようになりました。……そのたびに自分の心の中で、今までの自分が崩れ、何かが目覚めたような感覚を覚えまして。今までは、はつきり言っていて周りに負けてはいけないという思いがあつていろいろ辛い面がありました。でもF夫ができないことを書いてきて、みんなも同じだというノートを読み、みんなで話し合った時、先生が、『中身はたとえ違つてもみんな何かで悩んでいるんだ。自分だけじゃない。だから隠すんやなく、お互いうち明けたらいいんやナ』と言ってくれた時くらいから何かとても気が楽になりました。どうやら誤解していたのは、私の方らしい。彼ら（周りのみんな）は、成績を上げるためにレポートを書いていたのではなく、自分はこの授業でこんなにもわかった、できたということが嬉しくて書いていたことに気づきました。その頃から、いつも成績を上げることだけを目標に頑張ってきた自分の生活に疑問を持つようになってきました。……先生、クサイ授業もいいもんですネ。

まとめにかえて

2008年に改訂された学習指導要領では、体育理論がこれまでよりも重視され、「文化としてのスポーツの意義」の学習が充実されました。2011年には「スポーツ基本法」が制定され、「スポーツは人類共通の文化」であり「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」であるとうたわれました。そして現在、これに基づいて、全国では「スポーツ基本計画」、各自治体では「スポーツ推進計画」の策定が始まっています。また、東京では、2020オリンピック・パラリンピックに向けて、600校の推進校を指定して「オリンピック教育」が始まっています。さらに、2015年には「スポーツ庁」が設置されて、スポーツ予算や施策をつかさどることになり、その中で、学校体育は、運動部活動はもとより体育科・保健体育科も初等中等教育局か

らスポーツ庁に管轄が移り、他教科とは別立ての扱いになりました。これらは一見、これからのスポーツの発展、子どものスポーツの未来にプラスに働くように思われるかもしれませんが、その内容を丹念に検討してみると、例えば、オリンピックの成功や残すレガシーをめざす本音はスポーツなのか「開発」なのか、みんなのスポーツへの財政支出（特に施設整備費）がどうしてこんなに乏しいのか、子どもに教育しようとしている内容が「スポーツはよいものだ」といううわべだけで現代スポーツが抱える影の側面に目を閉ざしていないか、小学校体育は他教科と別扱いでいいのか等々、どんどん疑問が出てきます。子どものスポーツについても、それを取り巻くスポーツ状況についても、「うかれない、くもらない、だまされない」視点で注視していく必要があります。（日本体育大学）

子どものからだ・

スポーツの現状と体育科の役割

黒川 哲也

はじめに—カンボジアの子どもたち

去る11月21日〜29日にかけて、カンボジア北部のチョンカル村、サムロン市、そしてアンコールワットで有名なシエムリアップの小学校で運動会を開催した。プロジェクト自体は4年目・5回目を迎えるのであるが、私自身は2度目の渡航であった。

今回の渡航で初めて気づかされたのが、生活様式の変化がカンボジアの子どもたちからだに及ぼしている影響であった。というのは、農村であるチョンカル村で普段、裸足やビーチサンダルで過ごしている子どもたちの走能力は、一緒に渡航した制野俊弘氏に言わせれば「何かのトレーニングを受けているよう」な走りであった。昨年度までも現地小

学生の運動能力テストを実施し、就学前の子どもの体力が日本の子どもたちと比べて高い可能性が示唆されたり、日常生活のなかでの「身ごなし」は、彼らの「からだの賢さ」を示す場面に出会ったりはしてきた。ところが、シエムリアップやサムロン市の大規模校に通い、普段、靴を履いて生活している子どもたちの走りは、足裏全体を地面に付けて走るような「ドタバタ」した走りだったのである。生活様式の変化が、子どもたちの運動の様子を変えてしまうわかりやすい実例として大変印象に残った。

1 Jリーグ人種差別事件

翻つて日本の子どもたちの体や運動能力の発達にも、心配なことがたくさんある。肥満や体力不足を理由に、学校体育の役割をあたかも健康・体力づくり、将来の生活習慣病の削減や高齢化による医療費の削減に向けた健康的なライフスタイル形成のための知識とスキルの教育などへの「雪崩現象」が世界的な学校体育改革のトレンドとなつている（後に紹介）。現実問題として日本の子どもたちの体の育ちそびれや不健康な生活スタイルの問題も、多数、メディアを賑わわせている。

運動会の組み体操での事故など、子どもからだや運動能力の未発達とそれを育てる教師集団の教育的力量の枯渇状況も問題なのであるが、筆者にとつて一面、衝撃を受けつつ、「やつぱりな」とへんに納得してしまつた事件が、Jリーグガンバ大阪チームの選手に対する人種差別ツイート事件である。

情報端末の浸透は、一方でジャスミン革命に見られるように人と人のつながりを公的監視から解き放ち、かなりフレキシブルなネットワークの構築と解体によつて、時に驚くような民衆の表現行動（抵抗のデモンストレーション）を引き起こしている。日本でも安全保障法制に反対するシールズの若者たちは、常設の固定的・実体的な組織を土台としていたのではなく、SNSによる緩やかなネットワーク（動機と関心の結びつけ）が行動を引き起こし、このことが逆に運動の広がりを創り出し、そのインパクトを強烈に表現したものと見える。しかし他方では、「いいね」ボタンを「ポチる」という行為で「つながってる」「参加してる」意識が醸成されてしまう運動は、基盤の脆弱性と刹那性を露呈してしま

う危険性をはらんでいる。

ところで、話を元に戻すと、今回のツイートは高校生によって発信されたことが、本人の告白と学校の謝罪で明らかとなった。国内のマイノリティに対する尊重と人権保障意識の欠落が、アイヌへの差別や沖縄の基地問題、さらにはジェンダー・バイアスの残存に現れ、一部の人大としてもヘイト・スピーチを許す国では、いくら試合前にフェアプレイ・フラッグを子どもたちがもって入場したとしても、スポーツの場に様々な差別が持ち込まれることは不思議ではない。また、ネットの匿名性の下での極めて暴力的なやりとりを見ていけば、ある種「気軽に」他者に対して差別的・暴力的な表現を行ってしまう日本の市民の成熟度は十分に予想可能である。

しかし、この問題について頭に浮かんだのは、差別的ツイートを発信した高校生は、中学校・高校の「体育理論」の授業で、「スポーツの文化性」についてどのような学習を行ったのか？ ということである。あるいは、そもそも「体育理論」の授業は行われていたのか、体育理論だけでなく体育授業や部活動・運動会等の体育的行事は、スポーツにおける平等や人権について、彼のツイートを止めるだけの教育力をなぜ、発揮できなかったのかということであった。

2 中学生のスポーツ観調査から

子どもたちが「生きづらさ」を携えながら生活せざるを得ない状況におかれていることは、この間繰り返し指摘されてきた。これをどのような乗り越えていくのか、さまざまな実践的取り組みが生み出されてきていることも確かである。こうした努力を無駄にしないためにも、そして何より子どもたちの「生きづらい」現実をリアルに捉えるためにも、彼らがどんなものの方・感じ方・考え方を身につけているのかを可能な限り明らかにする必要がある。

以下では、今年度、子どもたちのスポーツ観について行った調査研究の結果の一部を紹介しながら、上述の問題に迫ってみたい。

そもそもスポーツ観とは、私たちのスポーツ実践（みる・する・話す・支えるなど）に際しての実践上の課題の見方・感じ方・考え方であり、体育授業における知識・技能の獲得は、最終的に彼らのスポーツ観の形

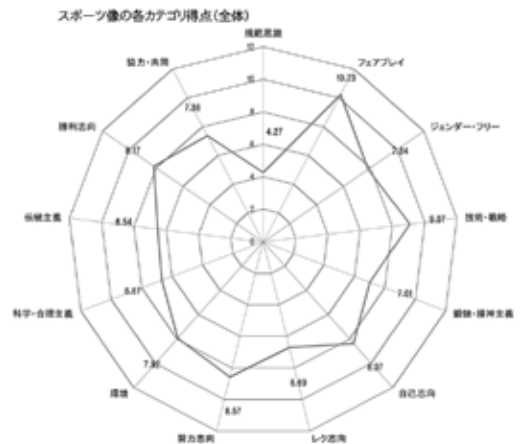
成に寄与する形で、つまり両者を切りはなすことなく形成することが重要である。例えば中西（1991）によれば、スポーツ観は、スポーツに関する体系化された客観的・具体的な知識である「スポーツ像」と、これとは相対的に独自の位置にあってスポーツに対する主体の価値観や立場性を表す「スポーツ

価値意識」から構成されると捉えることが可能である。

以上のような定義にもとづいて、調査は「スポーツ像」を「フェアプレイ」「規範意識」など13の要素から、そして「スポーツ価値意識」は「スポーツの有用性」及び「陶冶性」から構成されるものと仮定して実施した。単純に、スポーツ価値意識・スポーツ像それぞれの要素についての得点を眺めてみると、特徴的だったのは、スポーツ像のうち「規範意識」に関する得点が、他の要素に対して著しく低いことである。より具体的に言えば、規範意識として問われた3つの問いのいずれにおいても平均点が2点を下回った（「とてもそう思う」〜「まったくそう思わない」の1〜4点の選択。つまり、3つの項目でかなりの割合で1点＝望ましくない回答だったということ）のである。

「規範意識」の質問項目

- ・ スポーツでは、勝つためにルールを破ってファールをしてもかまわない。
- ・ 審判が地元チームに有利な判定をするのは当然だ。
- ・ スポーツ選手が勝つためにドーピング（薬や注射）を行うことは仕方がない。



さらにスポーツ観の「スポーツの有用性」（生活や身体形成に役立つ）「陶冶性」（さまざまな人間の資質をもたらす）という2つの要素の得点の組み合わせで回答者を分類すると、5つのタイプが抽出された。一つ目は、スポーツが役に立つし、人間の成長にも意味を持つと考える「文化的価値肯定」タイプ、二つ目はスポーツが生活上役立つ存在であることを認める「有用性自覚」タイプ、第三はスポーツを生活の役にも立たないし、人間の成長にも意味を持たないと考える「文化的価値懐疑」タイプ、第四は成長には意味を持って、日常生活に役に立つとは考えない「有用性懐疑」タイプ、そして第五は、スポーツの発達上の価値を認めない「陶冶性懐疑」タイプである。

スポーツ観を構成する各要素の得点とスポーツ観タイプとの関係を見ると、「規範意識」「レク志向」「協力・共同」を除くすべての因子で「文化的価値肯定」タイプが最も高い得点を示し、逆に「文化的価値懐疑」タイプはちょうど反対に、上記3つと「科学・合理主義」以外のすべての因子で最も低い得点を示していた。各要素の得点が高いことが「望ましいスポーツ観を身につけている」と仮定すれば、「文化的価値肯定」タイプが最も望ましいスポーツ観を身につけており、逆に「文化的価値懐疑」タイプが最も望ましくないスポーツ観だということができる。

では、それぞれのスポーツ観に影響を与えた（一位に挙げられた）経験についてみると、全体として中学生のスポーツ観に最も影響力を持つのは「テレビ（34・2%）」であり、「部活・クラブ（29・9%）」が続く。「体育授業」は5・7%しか影響を受けていない。そして、スポーツ観タイプ毎に影響要因を探ってみると、スポーツ価値意識がプラスの「文化的価値肯定」タイプ及び「有用性自覚」タイプは、いずれも体育授業の影響が5%を下回っている（テレビと部活・クラブが上位2位）のに対し、「文化的価値懐疑」タイプをみると、最も影響を受けているのは「マンガ・雑誌」であり、部活・クラブの影響が他の3つのタイプと比べて最も低い割合になっていた。そして注目すべきは、「文化的価値懐疑」タイプは体育授業を1位に挙げている割合が15・7%で最も高かったという事実である。果たして、私たちはこの結果をどのように受け止めればよいのであろうか。

つまり、体育授業が彼らのスポーツ観の形成に影響を与えていない、

というよりもどちらかというとスポーツの価値を感じさせないように機能している可能性が示唆されたのである。ただし、全体的に得点の低かった「規範意識（スポーツ像）」についてみると、「文化的価値懐疑」タイプの子どもたちは、全体的に得点の低かった「規範意識」で最も高い得点を示していたことは注目に値する。

ただこのことは逆に言えば、運動部活動やクラブ活動が子どもたちのスポーツ観に極めて強い影響力を持っていることを示しているとともに、テレビやマンガなどのメディアの影響もやはり見逃せないことを示唆している。メディアの影響力を考える場合、近年のスポーツマンガは、私の子ども時代に愛読していたいわゆる「スポ根」ものとは様相を異にしており、スポーツの戦術を中心にしたもの、スポーツ・トレーニンングや心理学の成果をふんだんに取り入れた作品、さらにはバレーボールの「アナリスト」が主人公となった作品まで発表されており、子どもたちはマンガを通じて体育授業以上のスポーツに関する科学的知識を獲得している可能性さえある。逆に「絶対に負けられない闘い」とか「仕方がないファール」、「選手の価値は契約金が示す」といったスポーツにおける勝利至上主義や商業主義を煽るような言説も相変わらず垂れ流されている。

3 体育カリキュラム改革のグローバル・トレンド

さて、子どもたちのスポーツに対する見方・感じ方にメディアや運動部活動等の影響が色濃く刻み込まれている中で、日本を含めた世界の体育カリキュラム改革は、健康・体力づくりへの雪崩現象とでもいえるほどの様相を呈している。

例えば、PISA調査で一躍



知られるようになったOECDの教育インジケータ事業では、先進国を中心とした各国の国際競争力に対する教育の影響力を明らかにすることが目標とされており、経済的側面（労働力・人的資源開発）に留まらない様々な国策と教育との関係が追求されている。例えば、OECD教育研究核心センター『教育と健康・社会的関与』という書籍の中では、肥満や体力不足など子ども・青年の身体的資質の未発達状態に対する危機意識とともに、高齢化に伴う医療費、生活習慣病の広がりによる労働力の毀損等に対応するか、そのために教育はどのような貢献が可能かという問題が取りあげられている。

また、例えば韓国のナショナル・カリキュラムには、カリキュラム改訂の要因として子どもの肥満や体力不足、あるいは創造性や人間性開発を教科の課題として受け入れることが、体育科の教科としての地位の向上・生き残りに必要であることが明記されている。子どもの体力の向上やからだ育てを体育科の課題として引き取ることは、ある意味了解しうるのであるが、国によるカリキュラムの目標―成果管理が強化される中で、アカウンタビリティの大義の下に、数値化される体力づくりと道徳教育になだれ込むことは、体育科が自らの首を絞めることにつながりかねない。

このことは、すでにアメリカにおいて具体的な形を取って進行し始めている。アメリカでは全米体育・スポーツ協会 (National Association of Sport and Physical Education: NASPE) は、1994年の「2000年の目標・アメリカ教育法」と「アメリカ学校促進法」の成立に伴って、各教科のナショナル・スタンダードづくりが求められたことに応じて、体育のナショナル・スタンダードを開発している。ナショナル・スタンダード↓州スタンダード↓学校カリキュラムという形で予算措置を伴う「上からの」改革は、それぞれのレベルで成果の証明が求められる。当然、成果の上がらない教育内容や取り組みや学区に対しては、廃止・中止・統合が求められることになる。体育科もこうした流れの中にあり、教育の「費用対効果」を上げる一つの方策として全50州のうちすでに22州で導入されている（2012年段階）のが「Online Physical Education (OPE)」である。つまり、インターネットを通じて「画面の中で」インストラクターが様々なエクササイズやスキルの指

導を実施する。受講生は、心拍計や活動量計を購入し、これをネットワーク経由で報告するという形で管理される。また、スポーツ活動への参加やスキルの獲得には、放課後や週末に地域のスポーツ施設で行われるプログラムへの参加が推奨されている。

NASPE自身は「Hybrid」な、つまりOnlineでの授業と対人的授業とを複合させた履修を推奨しているものの、OPEの広がり、特に貧困地域の学校から体育・スポーツ施設が消えること、したがってそこに通う生徒たちのスポーツ経験を奪うことにつながる危険性ははらんでいる。

おわりに―スポーツ&身体的リテラシーを

いかに形成するかという課題

カンボジアの子どもたちの生活はボル・ポト政権の虐殺と長い内戦の結果として、経済的な貧困のみではなく、文化的な貧困にも覆われている。グローバルイズムは、彼らの「剥奪された身体」に近代主義や市場原理を刻み込み、彼らの生活を引き裂いていこうとしている。翻って、先進国と言われる国々においても、経済的・文化的剥奪が進行しており、さまざまな場と対象と形態による暴力として現前化してきている。こうした中で子どもたちのからだをいかに耕すかが切実な課題である。同時に、スポーツがメディア・コンテンツとして様々な言説を振りまいている中で、これを批判的に解釈し、仲間とコミュニケーションを生み出す力が求められてもいる。言い換えれば、スポーツと身体に関するリテラシーを子どもたちに育てることが、今日の学校体育に課せられグローバルな共通課題だと言えるのである。

注1 中西匠（1991）子どもの認識発達とスポーツ観の形成過程、広島大学教育学部紀要第2部（40）：133―139

注2 OECD教育研究核心センター（2011）教育と健康・社会的関与―学習の社会的成果を検証する―、明石書店

教育現場における

「組体操」問題の語り方

神谷 拓

1. 組体操問題とは何か

みなさんが関わる学校では、運動会で組体操を実施していますか？最近、そのあり方が問題視されているので、本稿で取り上げたいと思います。いったい、組体操のどこに問題があるのでしょうか。以下ではまず、その批判に耳を傾けてみましょう。

この問題に取り組んでいる研究者に、名古屋大学大学院・准教授の内田良がいます。彼の著書『教育という病』（光文社新書、2015年）では、組体操に関わる事故の多さについて指摘されています。具体的には「組体操中の事故は、跳箱運動とバスケットボールに続いて3番目に多く」（46―47頁）、しかも、ケガをする部位も、体の中心をなす体幹部、なかでも、重大事故につながりやすい頸部の割合が高く、腰部や頭部の割合も高いと指摘されています（49頁）。それもそのはず……。小学校では9段のピラミッドを成功させた事例があるようですが、その際にかかる最大負荷は3:1人分、6年生男子で119キログラム、女子で121キログラムもあるそうです（56頁）。これだけの負荷が一人の体にかかるのですから、ケガをするのも納得がいくところでしょう。

しかし、このような問題が十分に認識されないまま、2000年代に入ってから、これまで以上に勢いを増しながら、組体操の巨大化・高層化が進み、さらには低年齢層への拡がりを見せました（59頁）。これは私の憶測にすぎませんが、既に90年代中頃には、「表現の質」を競うための道具である跳箱を意図的に巨大化させ、モンスターボックスと呼ぶ（「克服の対象」とする）テレビ番組がありましたので、組体操の「高

さ信仰」の背景にも、そのようなマスコミの影響があつたのかもしれない。いずれにしても、命を守り、育む場である学校において、このような

問題が発生してきた事実から、私たちは目を逸らしてはなりません。「もはや『安全な組体操はない』と理解すべきである。それほどのリスクを冒してまで、巨大化・高層化を目指す理由はどこにもない」（70頁）という、内田の主張を重く受け止める必要があります。私自身も、巨大化・高層化した組体操は必要ないと考える立場です。

2. 組体操問題の「語り方」の課題

しかし実際には、このような危険な状況が指摘されているのにも関わらず、改善には至っていないようです。内田は「私が解せないのは、これだけのリスクを丁寧に表示してもなお、それを直視せずに組体操を支持しようとする態度である。しかも、私が人伝に聞いたり、ウェブ上で知ったりした限りでは、学校現場にいる少なからぬ数の教員がそのような態度を表明している」（73―74頁）と、憤っています。

なぜ、このような状況になってしまったのでしょうか。まずは、現状の組体操の問題に対して「具体的にどのような対策が必要なのか」を、内田自身が示していないことが挙げられます（75頁）。それは本人が認めているところでもありませんし、また、教育社会学を専門とする彼に、そこまでを求めるのは酷でしょう。むしろ、対策がない指摘には耳を傾けないという「聞く側」の姿勢こそ、問題にされるべきだと考えます。

同時に私は、内田自身のこの問題の「語り方」にも課題があるのではないかと思えます。例えば彼は、学校で組体操を実施する矛盾を、学習指導要領における記述から指摘しています。具体的には、「組体操は、文部科学省が定める学習指導要領に記載が無い。それにもかかわらず、負傷事故が多発しているのである」（47―48頁）というようにです。たしかに学習指導要領は、国の示す教育課程の基準として告示されており、その観点から問題点を指摘するのは、ある意味オーソドックスな手法とも言えます。しかし、彼が注目していた学習指導要領上の記述は「体育」でした。それは、「組体操の披露は運動会のときだが、練習は体育の時間にもおこなわれる。仮に学習指導要領に組体操の記載があるとすれば、

それは小学校の体育科、あるいは中学校や高校の保健体育科ということになる(57頁)という理由からでした。

しかし、この文脈で考えると、例えば被災地で開催された運動会における、火を自分たちでおこすところから始まる聖火リレー、特定の地域に伝わる「謎のダンス」(学習指導要領の「体育」には含まれないダンス)、馬にのった入場行進、地域住民を巻き込んだ飴食いリレー、応援合戦……などなど、おそらくこれらも学習指導要領の「体育」に載っていないから、組体操と同様に実施する根拠がないことになります。そして、実際に学習指導要領に記されている種目だけで運動会を実施したら、とても味気ないものになりますし、それは教育現場の先生方の目から見ても現実的ではありません。そう考えると、彼の「学習指導要領(の「体育」)に載っていないのに組体操を実施するのはおかしい」という「語り方」が、かえって教育現場から問題を遠ざけてしまっているように思えます。

さらに言えば、そもそも運動会は、教科外活動・特別活動に位置づけられた「学校行事」です。教科とは異なる領域ですから、指導する原理も異なることになります。単純化して述べれば、教科では知識や技術の習得がめざされ、教科外活動では自治集団活動を通して思想や行動の形成が主目的とされます。その中でも、後者に位置づけられた学校行事は、「連帯と団結による意志表明」の場として重視されてきました。それは、そもそも地域の行事が「住民としての意志を地域の内外に対して表明し、かつ、住民相互もその意味を確かめ合う」という性質をもっているからです。例えば、みなさんの住んでいる地域のお祭りでも、「五穀豊穡」とか「子どもの健全育成」とか、そういった願いや思いに支えられて実施され、地域住民の連帯や団結を築いていることでしょう。このように考えると、教科外活動・特別活動において取り組まれる、運動会や組体操において問うべきことは、①どのような目的、願い、意志に支えられているのか、②子どもたちが団結し、自治的に取り組んでいるのか、③組体操が連帯や団結を示すのに適切な方法・手段か、といったことにならないでしょうか。

それに関わって、内田は以下のように批判しています。
「なぜ、組体操が学校教育のなかで取り入れられているのか。組体操を

支持する教員からの回答は、見事に一致する。すなわち、組体操は子どもが『感動』や『一体感』『達成感』を得ることができるからである。組体操の教育的意義とは、それらの感覚を味わうことにある」(61-62頁)

『感動』『一体感』『達成感』といった眩い教育目標によって、他のことが何も見えなくなってしまうっており、『組体操はよいもの』と素朴に信じられていることが、大きな問題である(65頁)

たしかに彼の指摘は当を得ている一面もあるのですが、これまで

解説してきたように、教科外活動論や行事論から捉えれば、少なくとも「一体感」という言葉に見られる団結や、「〇〇感」といった言葉で示される、内面を表現すること自体は、運動会の指導において否定されるものではなく、むしろ重視していく性質にあります。この点においても、彼の「語り方」と教育現場における指導との間には、隔たりがあるように思えます。

3. 教育現場に即した語り方とは

では、組体操の問題を、どのように語っていけば良いのでしょうか。先ほど示した①どのような目的、願い、意志に支えられているのか、②子どもたちが団結し、自治的に取り組んでいるのか、③連帯や団結を示すのに適切な方法・手段か、といった観点から検討すると、どうなるでしょうか。

まず①に関しては、内田が批判した組体操の「感動」「一体感」「達成感」が、どのような目的や意志に支えられているのかを検討する必要があります。私たちは、何か目的や願いがあるから団結するのであり、その結果、「感動」「一体感」「達成感」が得られます。果たして組



体操に取り組んでいる学校では、何のためにやるのかを子どもに考えさせ、議論させたうえで、実施しているのでしょうか。また、毎年、子どもは変わっていくのですから、その集団が示す目的や意志も少しずつ変化することになります。組体操の指導をしている教師は、そのことを確認しているのでしょうか。このようなプロセスを抜きにして指導を進めると、教師も子どもも何のためにやっているのが分からない、無意味な活動になるでしょう。その無意味さを隠蔽する装置が、組体操の高層化なのではないでしょうか。

あるいは②に関して言えば、子どもは組体操を自治的に取り組んでいるのでしょうか。自治的に取り組むとは、何のために行うのか、どのような人数で行うのか、どのような表現をするのかを自分たちで決めて、運営することです。もちろん、すべてを子どもが決めるのは無理な場合もありますから、実際には、教師と子どもと一緒に決めたり、子どもが部分的に決定したりすることも含めて、自治と捉える必要があります。そして、たとえ子どもが決めたことでも危険が伴うようであれば、それを指摘して、修正させるのが教師の役目です。現状の組体操で、そのような自治のプロセスが意図的に設けられているのでしょうか。

また、これは③で示した課題とも関わることですが、もし教師が前面に立つて指導し、子どもが意志を表明したり、あるいは決定、判断したりする余地がないのであれば、組体操は運動会のプログラムとしてふさわしくないことになるでしょう。そしてその際には、別の種目やプログラムを、子どもとともに考えていくことが求められるのです。

4. もし学校で組体操を実施するとすれば

私のささやかな実践から

私は大学1年生に、組体操をつくって発表するという演習(90分×15コマ)をおこなったことがあります。まず、何のために組体操をするのかを考えさせました。学生からは「団結する」とか「協力する」といったことが挙げられたので、もう少し突っ込んで、何のために協力したり、団結したりするのかを考えさせました。最初の2コマを使って、ようやく「Act in a body」教師を志すものとして、「というテーマが決まりました。つまり、教師をめざすものとして、団結した姿(Act in a

body)を表現しようという訳です。

その後、そのテーマが表現できるような、組体操の構成を考えさせました。そもそも、教師らしきとは何か、団結とはどのようにして表現できるのか、団結していない表現とは何なのか……。メリハリをつけなければならぬ、声をかけあって息を合わせなければならない……。いろいろな意見が挙げられていきます。その後、受講生が9人だったので、3人1組のグループに分かれて、表現の構成を考えることになりました(3コマ目)。そして、4コマ目からは、体育館で実際に身体を動かしながら、全員で構成を練り直していきます。私はあまり口を出さずに、映像係に徹して学生の演技を撮影し、気がついた点をコメントする程度に止めていました。

ここまでは順調だったのですが、問題が発生！ 教員になるための研修も兼ねた、新入生合宿という大学の公的行事を、受講生の1人がサボったのです。教師を志すものとして団結すると言っていたのに、教師になるために必要な行事を「すっぱかす」という事態を受けて、私は話し合いの時間を設け、「もう一度、身の丈に合ったテーマを設定してはどうか？」と学生に問いかけました。つまり、今の「Act in a body」教師を志すものとして「というテーマは、君たちには重すぎると、もう一度、自分たちの願いや思いを見つめ直すことを求めたのです。しかし種々議論した結果、今回のことを糧にして、当初のテーマのままで行うことが決まりました(6コマ目)。その後の練習は、以前よりも真剣さが増したように感じ



「震災からの復興
〜七ヶ浜を考える」の
取り組みより

瀬成田 実

1. 取り組みの概要

私は、5年間の組合専従を終えて2015年の春に現場に戻った。赴任した向洋中学校は、人的被害は少なかったが被災地域にある学校である。奇遇にも19年ぶり2回目の勤務となるため、保護者には私の教え子も少なくない。

第1学年総合学習「震災からの復興〜七ヶ浜を考える」は、本校の実態を踏まえ、私が震災直後から今日まで見聞きした被災地や子ども教職員の状況をもとに、以下のねらいを持って構想した実践である。被災校の教師たちの先駆的な実践にも学んで取り組んだ。

- ① 東日本大震災のあらましを理解し、それぞれの体験に基づく思いを綴り、語る。また、「いのち」の大切さについて考える。いのち
- ② 復興に努力する人々を知ることとおして地域理解や職業理解を深め、生き方について考える。学びの総合
- ③ 18歳選挙権を見据え、「社会参加」の学力を身につける。社会参加

幸いなことに、校長がこの取り組みを後押ししてくれ、1学年の教師集団も、私の提案に快く賛成してくれた。町教委が聞き取り調査の訪問先開拓に全面協力してくれたことも実現への大きな力になった。9月からスタートしたこの取り組みの全体像は次のとおりである。

- ① 3・11東日本大震災を振り返る1

■新聞記事、映像、写真などを活用

- ② 3・11東日本大震災を振り返る2 「あの日の向洋中」
- ③ 3・11東日本大震災を振り返る3 「作文」
- ④ 学習復興に携わった（携わっている）人の体験談を聞く

講師：徳水博志さん（元小学校教諭）

- ⑤ 聞き取り調査

〜復興に立ち上がる人々 班を作り、聞き取り調査を行う。

- ⑥ 聞き取ったことをまとめる ↓ 課題・展望

- ⑦ 発表・聞き合い ↓ 学級・学年

⑧ 七ヶ浜の将来を構想する ↓ 2年次 ↓ 自分たちに行えることは何か ↓ 考える ↓ まとめる ↓ 発表する

11月末までに表の⑥まで取り組みが進んだ。本稿では、紙幅の関係で①の私の授業を中心に報告する。

2. 「3・11大震災あの日・その後・いま」

私の授業は、この総合学習の導入に位置づけ実施した。タイトルは「3・11大震災あの日・その後・いま」である。当日は生徒94名、本校教職員9名のほか、保護者4名、研究者4名、町教委1名が参加した。授業の内容はおおよそ次のとおりである。

- ①津波の基礎知識と宮城県の被災状況②浜市小と戸倉中のできごと（ビデオ）③「命」を考える（雄勝小児童の作文とNHK「命と向き合う教室」より）④被災地は今⑤中学生伝えたい3つのこと（「まず命」学習の大切さ）「社会参加を」

授業途中の感想発表で、祖母が亡くなった悲しみを涙を流しながら語った子もおり、どの生徒の目も真剣で、幼い頃の自分の体験と重ね合わせ、様々な思いをめぐらせたようだ。次の授業感想を読んでほしい。多様な視点で震災を考えたことが伺える。

【3人の感想文を紹介】

■この授業は、私たちの中にある震災を風化させないためや、恐ろしさを忘れないための授業なんだと私の中で思いました。ビデオを見て、体の中心から広がっていくような寒気がしました。私の祖母は、津波の被害にありました。店を営んでおり、知っている人がたくさんいました。〜中略〜あの日のことを思い出すと同時に、恐怖をかみしめ、災害について考えていきたいと思いました。たくさんの犠牲になった方々のためにも後世に伝えること、この思いを忘れぬこと、犠牲者を増やさないためにも、このことをしっか



り学びたいと思いました。(女)

■私はビデオや話を聞いて泣いてしまいました。地震というものほども怖く恐ろしいものだ改めて思いました。中略しかし、それを乗り越え、次に進もう！と思う気持ちがとてもすごいと思しました。地震はいつまた来るかまったくわかりません。だからこそ、家族との時間、友達との時間を大切にしようと思いました。私たちは、今ここで生きていることは、ぎせきです。生きているだけで幸せなんです。そのことをもう一度よく確かめて、生きていきたい！と思いました。これからも3・11は忘れられません。いや！絶対に忘れたくありません！このことを何年先もいろんな人に伝えていきたいです。(女)

■私は震災で母とおばあちゃんを亡くしました。もともと父がいなかったので、母の弟しか、今いません。「母が亡くなった」と聞いた時は、さびしいし、なんで、という気持ちがあったけれど、それ以上にショックすぎて、お葬式の時も泣けませんでした。でも、いないって実感した時に、悲しくなつたし、中略震災から1年くらいまでは、妹のMと一緒に夜泣くことはよくありました。でも今はもうしません。おばあちゃんはまだ見つからないけれど、今日の授業を受けて、私も人助けできたのかな？や、みんなもそういう経験をしているんだと知りました。それに、動画を見ていて、Kちゃんと同じように、共感しながら見ていました。私は、母やおばあちゃんの分までしっかりと生きなきゃと再確認のできる授業でした。(女) ※ Kは祖父を亡くしたことを涙ながらに語った子

3. その後の取り組みから

第2時以降、子どもたちは、当時の向洋中の様子を知り、作文「震災といのち」を綴り、雄勝の取り組みを学んだ。これらを通して、「いのち」や「人と人のつながり」を学んだ。

感動的だったのは、作文の授業で、親を亡くした2人の姉妹が班や学級にその事実を吐露する中で、級友間の「心の交流」ができたことだ。

「M子があんなにつらいことがあったとは知らなかった。あんなことがあったのにも笑顔です」と思っている。これから何かあったら相談とかしてね。いつでも待つてるよ」

これは、作文発表会後に級友がM子に書いた手紙だ。

4. おわりに

4年半を経た今、子どもたちは、今回の学習を通して、「改めて」という言葉を多用しながら「大震災の怖さ」「つらかったこと」「命の大切さ」「当たり前前の生活のありがたさ」「家族の意味」などについてリアルに語り綴った。子どもたちは、かなり鮮明に「あの日」のことを覚えていた。悲しみやショック体験の「トラウマ」を今日まで心の片隅に閉じこめながら生きてきたことがわかった。それは私たちの予想を超えるものであった。震災直後、「まだ幼いから3・11を思い出させてはいけない」という「配慮」からか、学校や家庭で震災体験を表現させることが少なかったのではないだろうか。

子どもたちは、母親や祖父を亡くした経験を持つ級友の発表や作文を通して、「つらさや悲しみは自分だけが抱えているのではない」ということに気づいたのではないかと思う。母親を亡くしたM子やY子は、それぞれ学級や班の友だちに親を亡くした事実を伝えることができた。その後、M子に対しては級友からのメッセージも届けられた。これらの学習や交流を通して、二人の心に重くのしかかっていた悲しみや苦悩が僅かかもしれないが緩和されたのではないか。また、まわりの子どもたちにとっては、身近に肉親を亡くした子がいることを認識したことにより、震災を一層自分のこととして捉えるのではないか。

子どもたちの「心のケア」には、「語らせないこと」ではなく、語り、綴り、表現させ、それを周りとシェアしていくことが何よりも大切であるということを感じた取り組みとなった。大人や教師は、「いっぱい語ろうよ」「辛ければ、悲しければ、泣いてもいいんだよ」というメッセージを、もつともつと子どもたちに伝えていくべきではないかと感じている。

(向洋中学校)



あれから5年、 そして後1年

吉長 牧子

〔東六郷小〕

被災し六郷中学校に避難してから、もうすぐ間借り生活5年が経とうとしている。震災直後5年間もこうして六中にお世話になるなんて誰が想像しただろう。中学生と小学生が同じ校舎で生活すること……それまでの東六郷本校で学校生活を思うと決して満足のいくものでないことはまぎれもない事実であった。しかし、中学校の先生方や生徒達のお陰で、どれだけ我々も助けられ、励まされてきたことが。

その中学生との交流も年々増えてきた。合同の避難訓練に始まり、中学生手作り紙芝居の披露、中総体壮行会への小学生の応援、中学生手作りカルタ大会、合同芋煮会など。

子どもたちが生き生きと笑顔で学校生活をおくることができるのも、こうしたたくさんの方々の支援のお陰と感謝している。

平成28年度末で、我が校も六郷小学校と統合することが決定した。来年度、開校60周年を迎えてからの統合となる。統合の話が出て、六郷小学校との交流学習も学年毎に計画実施され、2年目を迎える。校外学習、飼育栽培学習、国語や体育……少人数ではなかなか難しい学習を中心に行われている。

今年度は初めて、六郷小学校の学習発表会（児童の部）で東六伝統の太鼓演奏を披露した。全校児童17名が自信と誇りを持ってたたいた太鼓

は、力強く心に響きみんなを感動させた。ぜひ残したいという太鼓活動をどのような形で六郷小に引き継いでいくか、今後考えていくことになる。今まで通りと言うのは難しいが、地域の方々も強く望んでいることの一つなので、何とか残していきたい。そして、大事にしたい。

最後に、11月21日学芸会があった。子どもの持つ力は我々教職員の想像を遥かに超え、会場全体が笑い感動と涙に包まれた。

しかし、東六郷としての最後の年は全校児童が1けたになってしまおうが残念でならない。

仮設校舎で

過ごした4年間

藤原 香奈子

〔野蒜小〕

野蒜小は、東松島市の小野地区にある仮設校舎で教育活動を行っています。学校そのものが野蒜地区外にあるため、本来の学区である野蒜地区に在住している児童も含めて、131名の児童の約八割がスクールバスで登校しています。2011年の12月末に仮設校舎に移ったので、4年が経ちました。

仮設校舎にいても、子どもたちはとても元気です。校庭は狭く、固定遊具は鉄棒だけです。その狭い校庭で元気に遊んでいます。運動会ができる広さではないので、車で15分ほどのところにある市内の別な小学校の校庭をお借りして行っています。校舎にはエアコンがあるので、冷暖房が行き届いており快適です。ただ、西陽が入る私の教室は、この時期、朝は暖房、午後

は冷房を入れないと過ごせません。体育館もありません。隣接する市民体育館まで歩いて体育の授業や様々な行事を行っています。ステージなし、緞帳なし、ピアノも暗幕ありませんが何とかなるものです。

震災後にいただいた支援で和太鼓を購入し、心のケアと元気発信のために全校で和太鼓に取り組んでいます。演奏している子どもたちも、聴いている大人たちも元気になるのが和太鼓の魅力だと思います。6年生は、「元気届け隊」として、市内の仮設住宅を訪れ、太鼓演奏を聴いていただく活動もしています。

この3月で野蒜小は閉校します。宮戸小と統合し、宮野森小学校として4月に開校します。今は閉校に向けての準備と、開校に向けての準備を並行して行っています。残念ながら新校舎が開校に間に合わないの、後1年は仮設校舎での暮らしになります。

職員室はとても明るいです。課題はたくさんありますが、協力して乗り切ろうという気概のある方ばかりです。復興支援の加配を生かし、上学年と下学年に一人ずつ副担任が置かれています。全学年の学級担任に空き時間が保障される点、複数の教師の目で子どもたちを見守れる点がとてもありがたいです。

家族や友達を亡くした子、自分自身も九死に一生を得た



子がたくさんいます。ちゃんと勉強させること、たくさん遊ばせること、そして、何か言いたくなった時に聴いてあげることが自分にできるのかなと思っっています。

勝つつぺや

心一つに 山二つ子

泉田 真孝

〔山下第二小〕

震災当初、どこにどのよう学校を再開できるのか検討を重ねた。山下小学校の普通教室と特別教室を開けてもらい、互いに譲歩した形で2校の併設が決まった。時程を全て同じにしなければならぬなど調整にいろいろと苦労した。運動会と学習発表会は、時期をずらし（3週間）別々に開催している。

ただし共同生活は、不便だけではない。一足す一が、三になるように両校は努力している。係・クラブと一緒に活動しているし、学習発表会を鑑賞しあったり、縦割り活動の発表の場でもある「山二ふれあい広場（山二小）&みやまフェスティバル（山小）」を共同開催している。一つの校舎に校長・教頭・教務主任や養護教諭、事務職員や用務員等通常は一人職の職員が複数いるということも大きい。何かと相談しあえるし、私は事務職員なのだが、用紙等の貸し借りもできて助かっている。

タイトルの「勝つつぺや 心一つに 山二つ子」は、今年の運動会のスローガンである。（やまめつことなまるのが正式らしい）運動会では「山二小輪太鼓」と「オブリガド笠浜」を児童が

披露した。震災復興と支援に対する感謝の心がかもったすばらしいものだった。（手前味噌）これからも山二小職員は、「やります まちます にこやかに」をモットーに「やり通す心でともにまなび会い にこやかにくらす子」山二（ぬ）っ子のために努力していきたいと思っっている。

山下第二小学校は、東日本大震災の津波により大きな被害を受けた。校舎は使用できなくなり、比較的高台にあり津波の被害を免れた山下小学校の校舎に併設する形で授業を行ってきた。新校舎は、平成28年7月に新山下駅近くの新市街地内に完成する予定である。それまでの約5年半の間、2校は共同生活をしてきたことになる。

あと4か月で閉校

今、思うこと

竹下 修央

〔中野小〕

2011年3月11日の東日本大震災で学区全域が津波に飲まれ、本校の校舎も大きな被害を受け、子どもたちも今まで慣れ親しんだ家から移動を余儀なくされてから4年と9か月あまり、学校も中野栄小学校の校舎の一部を使い、これまで続いていた中野小学校の歴史を刻んできました。2013年の4月7日に津波を受けた校舎を取り壊し、校舎お別れ会をしてから教職員や児童そして中野小学校に携わるすべての人達が中野小学校の閉校を意識して過ごしてきました。

先日、河北新報社の後援のもと中野小学校のメモリアルイベントを日立システムズホールで行いました。これまで、学校再建に向けて子どもたちのために多方面から支援をしていた、いた関係者の方への感謝の意味も込めてのイベント。その中で、中野小学校の142年間の歴史を振り返ると共に来年の4月からは中野小学校ではない学校で別々に生活していく子どもたちが未来へ向かってたくましく成長している姿を披露することができました。今学校は、閉校に向けて忙しい日々を過ごしながら、来年度子どもたちが、他の学校に行ってもすぐ馴染むことができるように一生懸命指導にあたっています。振り返れば、震災後1、2年は子どもたちの心のケアを中心に、少しずつ本来の学校生活に戻れることを目標に頑張ってきました。「間借り」という言葉をあえて使わず、ここが中野小学校再出発の場だとお互いに確認し合いながらの学校生活。3年目以降は、学力の向上も視野に入れながら新しく赴任してきた先生方の熱い思いのもと子どもたちはたくましく成長していききました。家庭もここ1年でやっと仮設住宅から新しい家への引越しが決まり、やっとスタート地点に立てた気がします。

震災で中野小学校は閉校してしまいましたが、中野小学校で経験した震災のことを子どもたちが後世に伝えていってほしいと思います。また、支援を受けてきた子どもたちが、今後何かの機会に積極的に支援する側になってくれることを心から願っています。

●教育時評

新制度元年

保育現場で

起きていること

小幡 幸拓

「子ども子育て支援新制度」(以下「新制度」)が施行されて半年が経過しました。国は施行前に「保護者の方に不利益のないようこれまでと大きな変化はない」と説明をしてみました。

現場の保育士達は日常的に「大きく変わった」という実感がありません。しかし施設を利用する保護者にとって状況は正反対であり、今、全国各地、そして宮城県内においても、保育料が上がったり(月四万円近く上がった事例もある)、子どもを施設に預けられなかったりと様々な問題が起きているのです。

新制度施行直後の四月に多子世帯の家庭で保育料の値上がりという事例が続出しました。年少扶養控除が適用されなく

なったことから大幅な値上がりにつながったからです。一部自治体においては、みなし適用を継続するなど自治体独自の財政補助をすることで、値上がりを防いだ自治体も存在します。「すべての子どもが平等に」と掲げ施行された四月時点ですでに「格差」が生じました。

埼玉県所沢市では、昨年までは問題のなかった育休中の保育を認めず「退園して下さい」との通達を出しました。「昨年までとやり方が違う!納得がいかない」と退園を求められた保護者たちが市に対して猛反発し、裁判も検討するという事態になりました。予想外の保護者の猛反発に市側も無視できなくなり、結果「退園取りやめ」を決定しました。同様に「育休保護者退園」を条例化していた埼玉県さいたま市では、所沢の事例を重く受け止め、条例が改正され、育休中退園が削除されました。

また、待機児童解消の目玉とされていた小規模保育事業では、認可園等連携先を確保しなくてはなりません。その確保が難しく、仙台市では35ヶ所中8ヶ所しか連携先が確保できて

いません。五年の移行期間の間に連携先を確保するようにと国は言っていました。が、制度が始まると急に「連携先が確保できなければ補助金は出せない」という通達が出され、施設側は運営に不安の声を上げています。三歳児以降の移行先がなく、預ける保護者としても不安は大きいのが実情です。このままいくと三歳児の待機児が爆発的に増えるのではないかと懸念があります。現時点で待機児童数は昨年から千八百人増加の二万一千六十七人となり5年ぶりに増加しています。

これらの問題の背景として「社会保険費削減」があります。少子高齢化が進む中で保育に公費を投じたくない政府としては、なんとか安上がりで待機児童解消をしたいのが本音です。「女性が活躍できる国」を謳いつつも子どもは預けられない状況に対して対策を迫られた時に出した答えが「小規模保育」であり「保育ママ」であり「認定子ども園」等基準を緩和した「民間の力」です。国の責任は殆どなく、補助金を含めたバックアップも少ないことから、抜本的な待機児童解消に繋がって

ません。国はさらに、民間の企業が参入しやすい環境作りを進め(基準等の緩和、株式会社への参入促進等)、保育士不足には、これまでの保育士資格よりも基準を下げた保育士資格の導入(保育ママ、小規模等無資格者の保育促進、地域限定保育士の導入等)を進め、幼稚園の認定子ども園化を誘導するような限定的な補助金を出し、受け入れ枠を増やし、数字上はゼロにしようと考えています。ここでは子どもや保護者の思いは関係なく、数字だけを追う話でしかありません。保育内容については全く議論もされません。新制度が進んでいけば公費は削られ基準も引き下げられるでしょう。その時に私たちが目指す「保育」は実現できるでしょうか。どんなにいい保育をしたいと思ってもそこを支える財源がなければ実現は不可能です。だからこそ前述した所沢市の保護者のように声を上げていくことが重要で、署名や国会議員に働きかけしていくことで制度を変えていくことが今求められています。

(宮城県保育関係団体

連絡会事務局長

りしながら、人の気持ちが分かったり、よりよい関わり方を学んでいくのが学校なのだと思つてみます。

そのためにも習得した文字を使って、その時々を、したとおり書き綴ることができるとなると嬉しいと願っています。時々、全員の作品を文集に載せています。読むとき、うんとほめます。読み書きがすすらせない子も、「いいね。よく書けたね。」とほめるようにしてきました。親がおやつと思う作品にも、子どもの感動や幼さ、人間性が表れています。子どもが気づいていない部分もたくさんあります。だから、教師が、ていねいに見たり、読みとつたりしてやると、「へえ、こんなところが良かったのか。」とうれしくなり、自信を持つきっかけになったりするのでないでしょうか。

自分で書きたいことを見つけ、書きたいだけ書き綴る仕事を通して、本当に美しいものや、人の温かさに心を寄せることができる人になってほしいと願っているのです。

学校で何をどう学んでくるのかということを親に知らせることも、とつても大事なことで考えています。だから、できるだけ、作品が生まれるまでの活動の様子や、教師の願いや感想も併せて書くようにしてきました。

しかし文集にして読み合い、家庭でも読んでもらうという仕事をしていく教師は、年々私の周りでは見かけな

くなっています。学校現場では、私の職場をみても、学級文集をみる機会が少なくなってきました。私は忙しい中でも文集やお便りで子どもや親とつながっていきたくと思っています。子どもの思いや願いを「紙」の媒体を通して、学級の子どもと親と教師が共有することが必要だと思つています。確かに、文集を発行することで不信を招いたり、教師の思いとは別な面倒を引き起こすことが、この頃はたくさんあり、余計なことをして心をくじかれる経験をしている人もいます。これも学級文集や学級だよりをみるのが少なくなつた要因なのかもしれません。「そういうことではない」と弁明しても、メールという方法で教師に対しての誤解が一斉

に広がり、学級での子どもと向き合えなくなっている若い先生もいて、「文集はいいよ」とすすめるにくくなつていきます。どう返すかが、難しい時代です。「個人情報保護法」ができたために、とても気をつかいます。内容によっては「載せていいか」と保護者の意向を確かめなくてはいけない状況です。「それは、教師が保護者の信頼を得てないから」と言われてしまえば、それまでですが、友達通しのトラブルなどは載せにくくなっています。

今、親の貧困が、子どもたちの学力や生活に大きく影響を与えています。片親で親が苦労していたり、子どもから親の目が離れていたたりして、子どもたちが、自分を肯定的に見ることができないでいます。昔は、みんなが同じように貧しかったり、忙しかったりしましたが、格差が広がっている今、親も価値観が大きく違っています。私は、「困っている親や寂しい子どもを大事に思っているよ」と、子どもの作品を通して応援していきたいのです。本当は、どの親も子どもを大事にしたいと思つているはず。

親も孤立しがちなときだからこそ、私たち教師は、「子どもと親の味方だよ」「共に子育てをしていきましょう」ということを、子どもたちの作品を読み合うことで、発信していきたいものだと思います。

(東仙台小)

平和の大切さを伝えたい

『へいわってすてきだね』

詩：安里有生 絵：長谷川義史 ブロンズ新社

『へいわってどんなこと?』 作：浜田桂子 童心社

『むらさき花だいこん』

文：大門高子 絵：松永禎郎 新日本出版

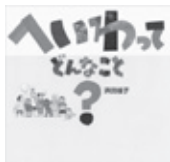
戦後70年という節目の年だった2015年、戦争と平和について話題の多かった1年でした。先の戦争への反省から不戦を誓い、国民の総意で平和憲法が制定されました。憲法9条を守り、戦争に巻き込まれることがなく、戦後70年、日本は平和を過ごすことができました。

本を通じて平和の大切さを学び合い、平和な世界の実現を目指し、子どもたちに真実を伝えていくことが自分たちの役割ではないかと、「みやぎ親子読書をすすめる会」では、「今、子どもたちに手渡したい平和の本—戦争と平和を考える絵本と紙芝居展—」を7月に泉図書館で開催しました。戦後50年の1995年と戦後60年の2005年にも、同様な絵本展を開催してきました。

今回すべての子どもたちに読んでほしいと思ったのは、『へいわってすてきだね』という絵本です。2013年6月23日、沖縄戦戦没者追悼式で、与那国島の小学1年生だった安里有生君が朗読した詩に感動した絵本作家、長谷川義史さんが絵を描いて素敵な絵本になりました。長谷川さんは、「絵本や歌や詩は優しい気持ちを育ててくれる。そっからしか、平和は生まれへんと思う」と語っています。年齢を問わず子どもも大人もすべての人々の胸に、「へいわってすてきだね」のフレーズが刻み込まれ広がっていくことを願っています。

それから、日・中・韓の絵本作家が手をつなぎ、子どもたちに贈る平和絵本シリーズの『へいわってどんなこと?』や『むらさき花だいこん』もお薦めです。すべての子どもたちの未来が平和で幸せであることを願い、今を生きる大人の責任を自覚したいものです。

(みやぎ親子読書をすすめる会/酒井文子)



おすすめ
BOOK

また若く、仕事が全くできなかつた私は、校長というものに何かを期待したり、また批判したりするよくなことはほとんどなかった。その校長さんは、そんな未熟な私から見ても、学校を運営するような能力を持っているとは思えなかつた。半年を過ぎて、職員に対して「あんた誰だっけ？」と名前を尋ねないと分からないことがあつた。これはひんしゅくを通り越して、不信感につながっていったように思う。運動会の前日、「太陽がほしい！」と絶叫して打合せが結ばれる。なかなか面白いと思うこともあつたが、学校としての決定が求められる場面になると、心許ない限りだつた。

そして、常に酒の臭いがしていたのを感じたのは、私だけだつたらうか。後になって分かることだが、本来の力を発揮できないような体調で働いていたのだつた。しかし、その校長さんが、私にとつてどうしても忘れることのできない人となる。高学年を持った5月。私は理科の実験で子どもを事故に巻き込んでしまう。救急車が来るまでの何ともどかしかったことか。同乗し、大きな病院に向かう間、どんな励ましの言葉をかけたかは、今も思い出すことが

きない。一刻も早く治療に取りかかつてほしい、ただそれだけだつた。

病院から戻つた私を待っていたのは、警察の取り調べだつた。理科室での実地検証を通して事故の全体像をつかむためだつた。でも、原因ははっきりしていたのだ。私の無知が全てであり、「100%私の過失です」という返事で、検分は終わった。「失職するかもしれない

わたしの出会つた先生 12

ある校長のこと

佐藤 正夫



た。楽観的な状態ではなかつた。包帯でぐるぐる巻きになつた子どもにかけられる声が見つからなかつた。病院を出たときはすでに真つ暗だつた。明日から何をどう頑張れば、あの子のためになるのか、皆目見当が付かなかつた。

帰り際、校長さんが「悪いけど、家の近くまで送ってもらえないかな」というので、言われるままに車を進めると、ずいぶん南の方の

ていた。今にして思うと、かける言葉などなかつたのかもしれない。「飯食つてけ」が彼の唯一の言葉だつたのだと勝手に思っている。

彼の職場での評判は相変わらずで、いるのかいないのかさえ判然としなないことも多々あつた。校長としての職責を実行できないのだから悪評が飛び交うのは当然なことなのだが、私はそういう声を無視していた。あの日の校長の姿が、

焼き付いているからだ。あゝこいつを今日このまま帰すわけにはいかないな。それ以上でも以下でもない。慰めでもない、励ましでもない。ただただ、側にいてやりたいと思つてのことだつたのだろう。上司とか管理職としての臭いを全く持たず、人として私の隣りに座つていたのだつた。

その校長さんは、次の年の冬、亡くなることになる。寂しい冬だつた。

私は今、その校長さんと同じぐらいの年齢になっている。どうなのだろう。彼の見せた木訥なあなたがたかさをわたしも受け継ぐことができたのだろうか。思い出すたびに、人としてのありようを考えてしまう。

いぞ」という警察官の言葉も耳には入らなかつた。そんなことより、怪我の大きさを頭がいつぱいだつた。その後、置き去りにされてしまった子どもたちの待つ学級へ向かい、ひたすら詫言ひた。そうして、怪我をした子のためにみんなの力を貸してほしいと何度も頭を下げた。

夕方、校長さんと一緒に再び病院に行き、医師からの説明を受け

みやぎ教育相談センターの相談員を引き受けて2年半が過ぎました。相談員になって初めての夏に、北海道帯広市十勝川温泉で開かれた「第18回登校拒否・不登校問題全国をつどい」（主催：登校拒否・不登校問題全国連絡会、同北海道実行委員会）に参加しました。この集会の中で考えさせられ、学んだことは、今、相談員の仕事を考える原点になっています。

集會主催者世話人代表の高垣忠一郎さん（立命館大学）の「いろいろな思い、やつとの思いでこの場に参加されている方もたくさんいらつしやるでしょう。このつどいがどういふものか、不安・緊張、いろいろな思いでいると思います。この2日間を通して、どうかその思いが安心に変わりますように」という挨拶が、この集會の性格を端的に物語っているようです。同じ開會集會での挨拶で、全教文部長の中村尚史さんは「子どもたちは競争という呪縛から抜け出したとき、大きく伸びていきます。そのための教育条件を整えることが私たち大人の責任です。ともに力を合わせていきましょう」と。

「未来は現在の中にあるくどう親や地域社会が子どもに寄りそえるか」と題した横湯園子さん（子どもの権利のための国連NGO日本支部副代表）の記念講演（写真下）は「動けなくなつたり理解不明のとき、少し待つてあげられれば。『わがままだ』

など性急に動くことを求めがちだが、体の動きに相違して心はめまぐるしく動いている」というところが印象的でした。

私は「高校生の登校拒否・不登校」の分科会に参加しました。顔ぶれは、現在不登校のお子さんをもつお母さん、「もう不登校は卒業した」お子さんをもつお母さん、高校の先生、補習塾の講師の先生、教職員組合の役員、NPOに勤務の方、相談員、かつて不登校だった若者（大学生）など、様々な立場で参加されました。当時の話し合いのメモには、次のようなことが記録されていました。

【母親A】2番目の子が不登校に。高校生になつた頃から我が家は「積み木くずし」状態で毎日が戦場。車を走らせるといつの間にか海に。死ぬことを常に考えていた。

【教員A】子どもの数減少だが、（少人数で）一人一人がよい意味で目立つ。

【教員B】カトリック系のミッションスクール勤務。以前は「くさつたみかん論」でいつた時代もあつたが、今は「愛」「まごころ」をうたつている。

【青年A】小2〜中まで不登校だった。今日は不登校の子をもつ親「ごさんがどんな思いでいるのかそれを勉強したくて参加した。」

【母親B】30代と29才の娘がいる。中学校のとき学校にいけなくなつた。「いかに

なくてもいい」（逆に）「頑張れ」ともいえないし。機嫌の悪い娘とつきあつた3年間。

【母親C】高3の男子と中3の女子。高3の子が不登校。（高2の）3学期からいつたりいかなかったり。主人は「なまけている」と。間にいるのがつらい。（涙ぐんで）すみません。ここにくるとついで。（と涙をぬぐう）高3の4月の始業式から学校にいけなくなつて8月をむかえている。この会に主人も一緒に出てくるといつたら「頑張つてきてね」と子どもたち。

【母親D】上の子が小学校から（学校へ）行けなくなり、沖繩に行つて1人で生活。今は成人し結婚している。孫が4人いる。

【相談員A】高校教員の最後の6年間定時制に勤務し、それまで数十年間と同じくらいの重い経験をした。（教員を）退職し現在相談機関の相談員に。

【教員C】補習塾の先生をしている。教室に入れない子どもが通う。

【母親E】中1の夏休み明けから。テーブルの下から出てこなくなつて。高校にいつてきちんと登校できるようになつた。6年間「学童」にお世話になつた。「学童」の仕事につきたいと思つているようだ。

【母親F】大学生の娘と高3の息子。息子が

相談センター報告(第3回) 相談員に

は(中学校のとき)冬休み明けから学校にいけない。いじめがあり、学校にもどれない。突然朝起きられなくなる。娘は中2の時から不登校。娘のいきたところⅡフリースクール、相談室など。学校は恐怖になっている。玄関で泣き出してしまふ。学校では「学校内に入れば出席」という対応をとってくれた。高3の息子はガラツと変わって3年間で3日しか休んでいない。娘も今は大学に通っている。

【相談員B(私)】宮城県で教育相談センターの相談員をやっている。相談の際アドバイスする場合があるが、新米で、正直適切なアドバイスか自信がない。今日は皆さんのお話をきいて勉強したい。

【教員D】高校の組合の執行委員。横湯先生は大学のときの先生。3人の子の母。

【母親G】単位制高校に通う高3の息子。小1を過ぎて半年の頃不登校に。中1も半年後に不登校。今単位制高校でホアンホアンとした暖かい環境で過ごしている。「5年計画」(5年で卒業できれば)を考えている。

【母親H】中2からさみだれ登校。中高一貫校だったのであがれるかなと思っていたが息子が「もう学校に行かない」とやめた。1年ひきこもりの後、「高校野球をやりたいから」と野球部のある

秋募集のところを受けて学校に行くようになった。「不登校の子が野球やりたいと登校するようになった。これはすごいことだ」と新聞にのったりして期待が大きくなると行けなくなった。今は結婚して子どももいる。……

自己紹介をかねた最初の話だけでも、このように問題が山積しています。話し合いは、2日目も続き、ひとつの発言に対して他のお母さんが自分の経験を話す。「そういう解決策もあるのか」と対策を共有しよう。問題に対して参加者が知恵を出し合う。その知恵が適確で、感心させられます。

「不登校」が社会的に認識され、学校の対応も柔軟になっていくこと、欠席や保健室・別室登校等の対応に対する問題点や課題、単位制や単位の扱いに対しても問題提起がなされました。

何人ものお母さんが、「1人でいると悶々としてつらい時間が過ぎていくのが、ここにきて本当によかった」と感想を話していました。同じような悩みをもった人がいることを知るだけでも少しほっとする。みんなが明るい。不登校の子がいると、家族も暗くなり、「私のせい?」と子どもがそれを負担に感じる。集会などに出るようになったお母さんが、「元気をとりもどし」、「お母さん、変わったね」と、当の子どもも元気になったといった、という報告もありました。



こうした集会は宮城県でも意識的にとりまわっています。先の10月31日には「2015子どもの未来をひらく教育のつどい」が開かれ「不登校・いじめ・引きこもりとどう向き合うか」分科会には18名が参加して意見・経験交流しました。また、それに先立つ8月16〜18日には「みんな21世紀の未来をひらく教育のつどい」全国集会在仙台市で開かれ、やはり「登校拒否・不登校の克服」分科会に全国から多数の方が参加しました。当教育相談センターでも、毎月第2土曜日に「不登校相談交流会」を設けています。

一人で悩まず、当教育相談センター(第2土曜日)だけでなく、月々土、電話・来所相談可能)やこうした集会でいろいろな方と交流する機会をぜひご利用ください。



おすすめ映画

Kに再会……

教師をしていて忘れられない子がいる。教師1年目に受け持ったKである。Kは、人懐っこく利発なところから、私も頼りにしていた。3年後、6年生で再び受け持つことになった。卒業制作の運動会入場門を夜遅くまで一緒に残りながら制作したことがあり、ある晩「先生、俺悩んでいることがあるんだ……先生より早く結婚したらどうしよう……」真顔で言った顔は今でもはつきりと覚えている。そのKが中学3年の若さで白血病で亡くなった。そのころ、組合青年部の県役員をやっていた私は、仙台に来るたび、入院しているD病院に見舞いに行っていた。行くことに髪の毛がなくなり、片足も切断し……しかし、Kは私が行くといつも笑顔で迎えてくれ、決まって将棋をしながら、他愛もない話題を時が過ぎるのも忘れて語り合った。



今回紹介する「Little DJ」小さな恋の物語」は仙台のD病院近くの映画館で観た。めったに泣かない私が映画館で号泣した。ある日突然の病に襲われる少年。絶望の中から原田芳雄演ずる大（おお）先生から、院内DJという生きがいを与えられ、多くの人を笑顔にするために命を全うしようとする少年。そして恋する気持ちも知り、みんなの心に刻まれて最期を迎えます。その全てが、Kに重なる。私は大先生のように、Kの希望の灯になれていたのか？生きていれば、きっと素敵な恋も待っていたはず。大切な教え子が私より先に亡くなるなんてことがあっていいのか……何より、もう一度（いや何度でも）Kに会いたい。いろいろ話したい。そんないろいろな感情が混じり合つて号泣になった。

実は、Kの葬式に参列した時には、涙が出なかつた。そんな自分が不思議だったのだが、この映画を観て号泣したこと、やっとKの死と向き合えたような気がした。Kが亡くなってから、実に10年以上経つてからのことである。映画は、時に人の人生と深く関わっていて、見る状況によつてまるで見え方が違つてくる。私は、この映画で救われた。

（鈴木吉雄・永野小）

センターの動き

〈10月〉

- 5日 待ちに待った最後のつうしん原稿が届く。ゼミナルstude. 近代教育論の胎動。ビーベスとモンテニユーを読む。夜、樋口陽一さんから高校生公開授業を承諾とのこと。ただ希望する日程は12月26日とのこと、どうするか検討に。
- 8日 つうしん発送に備え、同封するチラシのセット、印刷などを行う。待つていた「つうしん」が、夕方に届く。
- 9日 高校生公開授業について樋口さんと電話で連絡。年度末の開催は取りやめ、新年度の方向を模索することにする。事務局会議で了承、届いた「つうしん」の発送作業をする。
- 10日 午前中、宮城教育のつどい実行委員会。分科会の打ち合わせをする。午後は『教育』を読む会。
- 14日 年明けの新春講演会に生命科学の中村桂子さんをお願いすることにする。次回つうしんの特集を何にするか打ち合わせ。大学関係者に企画編集で協力を打診。
- 16日 宮教大に「つうしん」81号企画で宮教大の黒川さんに相談に行く。
- 23日 事務局会議。議題は「つうしん81号」の内容。中村さんの新春講演会、冬の学習会の内容など話し合う。
- 27日 仙台市教委（学校規模適正化推進室）と学校統廃合について話し合い。国語・物語作

品読み講座打ち合わせ。
28日 「子どもと授業を考える若い教師の会」学習会、2年生国語教材『名前を見てちょうだい』の実践報告をもとに話し合う。

〈11月〉

- 30日 プロジェクター故障、修理に出す。
- 31日 「みやぎ教育のつどい」1日目。「幼年教育と保育そして学校教育」分科会参加。
- 1日 「みやぎ教育のつどい」2日目。午前中は「能力・発達と学習」分科会に参加。午後は、体育の分科会に参加。
- 2日 宮教大の神谷さんにつうしん執筆を打診・打ち合わせ。午後は、国語・物語作品読み会の講座の打ち合わせ。
- 4日 修理したプロジェクターが届く。夜、社会科教科書問題検討委員会に参加。
- 5日 新春講演会の演題が決まり、チラシ作成にとりかかる。
- 7日 小6担任交流会。10名を超える参加。
- 8日 「道徳と教育」学習会。内容は「戦争期における国家主義の道徳思想」と、道徳教科書の学校現場の受け止めと現状について報告・討論をする。
- 14日 午後、中学校教科書採択についての県民のつどい。50名以上が参加。関心の高さがみえる。
- 16日 午後、ゼミナルstude. 第6講。近代教育の興りをヴィーゴとデカルトを中心に読む。
- 20日 センター基金問題で会館

事務局と話し合い。
21日 国語・物語作品読み講座「かさじぞう」と「ヒロシマのうた」の報告をもとに話し合う。

〈12月〉

- 25日 「子どもと授業を考える若い教師の会」学習会。『名前をみてちょうだい』の後半クワイマックス部分を中心に、実践検討を行う。
- 27日 事務局会議。今後のセンターの活動について自由に議論。
- 28日 『教育』を読む会。安保法制と18歳選挙権を考える。
- 1日 「みやぎ教育のつどい」事務局会。事務局会では教科別分科会などのあり方をめぐって議論。
- 5日 午前中、「みやぎ教育のつどい」実行委員会。民教連作業午後、市民の会総会・講演会。
- 7日 ゼミナルstude. 内容はコメニウスの教育思想について。
- 10日 つうしん81号の第1稿が届き、さっそく校正始める。
- 14日 つうしん原稿すべて入稿。
- 17日 「3・11を考えるつどい」の打ち合わせ。
- 19日 つうしん81号脱稿

訂正とお詫ひ

前80号にミスがありました。次の通り訂正いたします。

14頁中段6行目

あまんきみこ

いぬいとみこ

（菅）